

寒川神社御所所蔵「大舟の飾り幕」について

菅根幸裕

寒川神社御所所蔵「大舟の飾り幕」は現在千葉市立郷土博物館に寄託されている。

法量は、幅78cm、全長15.4mで、材質は素地が緋羅紗、裏地は木綿布である。裏地に嘉永3年(1850)作製の墨書があり、往時の千葉妙見の祭礼の様子を示す貴重な歴史・民俗資料である。

1、 千葉妙見祭礼および結城舟について

室町時代の中期ころ、千葉妙見宮の別当寺であった金剛授寺尊光胤で編纂された『千学集』を近世に抜き書した『千学集抜粹』には以下の様に書かれている。

千葉御神事は大治二年丁未七月十六日始る也、七世常重御代の事也、御幸仮屋は神主八人、社家八人、乙女四人、御祭の御舟は宿中の老者の役也、供物は千葉中野十三貫ところ也、同関銭諸侍衆上げ申也、一関は仮屋の供物を神主にとらせ、一関は老者にとらせて御祭を勤め申也、結城舟は天福元年癸巳七月廿日始まる也、十二世時胤の御代の事也、御浜下りの御送りの御舟也、結城の村督に完(六)倉出雲守と申すもの永鏡のために取立てしもの也、結城は今の寒川なり、(1)

すなわち、天福元年(1233)7月20日に、結城舟は、御浜下りの送り舟として、結城の村長の完倉出雲守という者が作成させたというものである。

一方、室町後期の作とされる『千葉妙見大縁起絵巻』には、千葉妙見の祭礼及び大舟について以下の様に書かれている。

一、千葉御神事、大治二年丁未七月十六日始ル也、常重の御世也、御幸仮屋ハ八人ノ神楽男、四人八乙女ノ御祭也。御舟ハ宿中老者役也、供物ハ千葉中野ト申所ヨリ出也、結城ノ御舟ハ、天福元年癸巳七月廿日ニ始ル也、時胤ノ御代也、御浜下之御送之御舟也、是も結城町人之役也(2)

この『千葉妙見大縁起絵巻』から、やはり天福元年(1233)に御浜下りとその送り舟である「結城舟」が始まったとしている。その前の「千葉御神事」についての記述に「御舟は忠老者役也」とあり、結城舟に先行して舟を出す行事があったと思われるが、それが千葉舟

であるかどうかはわからない。

近世に入り、正徳5年(1715)、佐倉藩に仕えた儒学者の磯部昌言は、『総葉概録』で、以下の様に記述している。

七月十六日神楽御旅所に幸し、廿日寒川に神幸、これを御浜出と言う。廿二日本祠に遷座す、この日を正祭として、千葉舟、結城舟とて、二つの舟を造り出して祭礼とす、ここでは、廿日には祭礼の為の舟を造っていたことが書かれている。

延享3年(1746)2月に佐倉藩に提出された「下総国千葉郡寒川村差出帳」には

一、妙見御祭礼 船壹艘

但シ 長サ三間半

横 二間半

是ハ破損仕候節は御林ニ而前々方入用被下来候、毎年七月廿日同廿二日、当村千葉町立合御祭礼相勤候、(4)

妙見祭礼用の船が一艘あり、その船の長さは三間半、幅は二間半であることが書かれている。そして毎年7月20日と22日に寒川村と千葉町が一緒になって祭礼を務めるとしている(5)。ただし、『総葉概録』の記述と異なり祭礼時に船を造るのではなく、船が常備されており、それが破損した時は、以前から御林から木を伐り出していたようである。

小沢清男氏の報告よれば、福島県相馬市中村の歓喜寺に伝来する『下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻』(以下『大縁起』)下巻には、千葉妙見の祭礼の様子が描写されており、そこには結城舟・千葉舟が描かれているという。紺地に金糸の刺繍がほどこされた飾り幕を船縁に付けた千葉舟を先頭に、刀を差した肩衣袴姿の者が続き、鉾を持った露払、神輿、白地の幟、馬に乗った立烏帽子の神官とその付き人、五色の笠鉾、さらには都川を挟んで結城舟(寒川船)が緋地に金糸の刺繍を入れた飾り幕を船縁に付け、町衆に引かれていく。千葉舟の上には、二羽の鶴の造り物を頭にかざして舞っている者、肩衣袴姿で囃子を奏でる者、立烏帽子に浄衣姿の者が描かれている。行列最後の結城舟にも舞装束を着た舞手が2人、立烏帽子に指貫姿の者、肩衣袴の役人らしき者と僧侶が描かれている。以上の様に『大縁起』には、近世の結城舟の祭礼時の姿を図示した唯一のもので、今回指定候補となった飾り幕の使用例が解る点貴重である。

和田茂右衛門氏の聞き取り報告によると、この千葉舟と結城舟は幅2間・長さ4間で、すべて骨組だけ舟形に造られた荒造りで、真菰で俵様に編んだもので装い、千葉舟も真菰で装い、周囲に金欄十二段幕を張り廻し、そこには6個の車玉を付けたものであったという(6)。これは、前述の『寒川町差出帳』の「長サ三間半 幅二間半」の記述とは法量が異なっており、また、『大縁起』に描かれた舟の図は決して荒造りのものに真菰で装った物には見えない、幕末から近代にかけて形態が変わったのであろうか。

2、飾り幕について

「飾り幕」は、幕の最後には「寒川村氏子中」と白羅紗で切りつけている。この幕が『大縁起』に描かれている本格的な構造の船を装ったものか、和田氏の聞き書きに伝える真菰で編まれた舟に用いられたものかは定かではないが、いずれにせよ、幕の中心部を舟の舳先に取り付け、幕の左右の舟縁を廻したものと考えられる。

この幕の裏地には由緒及び製作に携わった人々の墨書がある。これについては、小沢清男氏の報告があり、建久年間（1190～99）に千葉介常胤が作ったところの祭具（飾り幕を含んだものか）の装飾の痛みが酷く、破れてしまったので、400戸の村民が、一日に一銭を貯えて、緋羅紗に竹と虎を刺繍した幕を作成したことが書かれている（ただし墨書部分が破れて改めて新調したものかどうかわからない）。由緒書きの最後には「嘉永三年庚戌蘭涼癸丑日」とあり、嘉永3年（1850）涼月（7月）に墨書を認めたとしているので、これが完成時と推測できる。以下奉納者名が続き、これらも小沢氏の報告に記載されているが、筆者の実見で新しい箇所があったので人名等を改めて記載しておく。

寒川邑兼帯

千葉寺村

名主

金三両奉納 秋元與惣兵衛

組頭

清古善左エ門

同

三賀屋平次郎

同

中嶋半四郎

同

松井金五郎

同

湯浅市兵衛

百姓代

山本卯兵衛

同

丸屋庄兵衛

同

松井七右衛門

組頭

布施重七

勸農

鈴木弥右衛門

同

奈部川彦八

同

田中吉兵衛

同

湯浅市三郎

同

仁平文次郎

新田世話人

北川清右衛門

中嶋半兵衛

大田屋安五良

日暮助五良

鈴木権兵衛

同 万吉

湯浅弥之助

新宿世話人

石川幸次郎

森川庄恂

齊藤孫十

深山文兵衛

鈴木弥一郎

日暮佐五右衛門

森川嘉左衛門

向寒川世話人

楠原要助

日暮佐吉

楠原藤吉

日暮留次郎

深山孫太郎

上野世話人

奈部川安太郎

松井市太郎

深山長八

中宿世話人

松井六右衛門

鈴木久次郎

松井甚之助

下中宿世話人

田谷太郎兵衛

小池治郎作

鈴木重七

今井弥七

田谷市太郎

下宿世話人

長谷川久兵衛

布施徳兵衛

伊藤巳之助

永嶋林蔵

判頭

鈴木七三郎

同 五郎吉

篠崎清五郎

楠原彦右衛門

鈴木長十

楠原半十郎

日暮新蔵

同 甚九郎

楠原藤五郎

深山傳六

同 源左衛門

田中吉兵衛

鈴木清八

伊藤嘉兵衛

松井清十郎

鈴木小十

同 清五郎

同 弥兵衛

布施甚右衛門

神寄弥右衛門
松井金四郎
布施五兵衛
高田千太郎
長谷川庄七
同 弥五郎
石川清兵衛
高田八郎兵衛
石渡甚十

このように名主 1 名、組頭 6 名、百姓代 3 名と行政の村役人順になっており、村として幕の作成が行われたことがわかる。ただし、名主の秋元與惣兵衛のみ「金三両奉納」と付されており、以下には金額が付されていない。由緒墨書にある 400 名の人々が 1 日 1 錢ずつ積立てて幕を作製したとは、秋元以外は等しく積立金を奉納したことを示すのであろうか。「下総国千葉郡寒川村差出帳」には寒川村の戸数を 337 軒とあり（7）、400 名というのは概数であることがわかる。以下の 5 名の「勸農」とは、古くは安定した土地所有を示す言葉から、いわゆる主だった者を表すと考えられる。次に村の地区毎の世話人合計 33 名が町ごとに書かれ、祭礼の範囲と氏子圏を知る事ができる。その氏子圏は新田・新宿・向寒川・寒川上町・中宿・下中町・下宿の七町であった。最後に「判頭」として 30 名が列記されている。この「判頭」とは五人組の筆頭のことである。

このように、「氏子中」としながらも、宗教的ヒエラルヒーより政治的ヒエラルヒーの序列で書かれており、寒川村としてこの幕を作製した意図がみられて民俗学的にも興味深い。

- (1) 『千学集抜粹』（千葉市立郷土博物館『妙見信仰調査報告書』第 2 巻 1993 年）
- (2) 『紙本著色千葉見大縁起絵巻』（千葉市立郷土博物館 1995 年）
- (3) 渡辺昌言『総葉概録』（佐倉市教育委員会『佐倉文庫』第 6 衆 1981 年）
- (4) 千葉市市場町和田家文書「下総国千葉郡寒川村差出帳」（『千葉市史 史料編 2 近世』千葉市 1977 年）
- (5) 小沢清男「寒川神社に伝来する『大舟の飾り幕』について」（千葉市立郷土博物館『研究紀要』第 6 号）、今回の所見は同論文を基本に作成したものである。
- (6) 和田茂右衛門『社寺よりみた千葉の歴史』（千葉市教育委員会 1984 年）
- (7) 前掲註（4）「下総国千葉郡寒川村差出帳」